

災害時の心得

その時、どのように行動すればよいか 防災行動の時間割

大地震などで災害が発生した場合、時間の経過に従って人々の行動や対応は、当然、変化していきます。【その時】【その直後】【数時間後】【翌日】【数日後】というように、状況に応じた行動が求められます。

大揺れが襲ってきた

①まずはわが身を守る時間帯

- 大揺れがきたら、大人の男性でも、身体が奪われます。それでもなお、身の安全を守らなければなりません。
- 少なくともその意識をもって、室内では家具やピアノから、外ではブロック塀や門柱から離れる。
- 素早く反応するのが困難な、お年寄りや子どもには大声で「机の下!」とか「ふとんをかぶって!」など、その状況に合った指示をする。
- テーブルやいすの下に入る。手近なものか両手で頭を守る。就寝中ならふとんをかぶる。



大揺れがおさまってきた

②家族を守る時間帯

- 身の安全を守り、「火の始末」の意識をしっかりとって、すぐに行動に移る。
- 火の始末とは、使っている火はすべて、仏壇の線香や蚊取線香までいっさい。
- 家族の救出や救護は、火の始末が終わってから。人手があれば手分けして。
- 古い家では、倒壊を警戒して、家族には外への避難を指示する。火の始末をしたら外へ避難。



大揺れがおさまった直後① 近隣の防火と消火の行動

③まちを守る時間帯

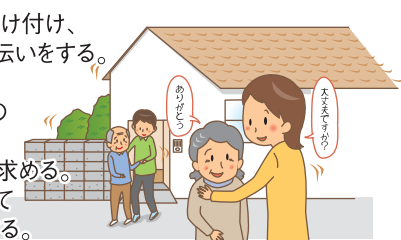
- わが家の出火の気配のないことを確認したら、近所同士声をかけ合って火の始末を確認しましょう。
- 外に避難してそのままとまっている人には、自分の家の火の様子を確認するようにすすめる。
- もしも出火を見つけたら、大声で家族や近所に知らせる初期消火にあたる。声を聞いたら消火器やバケツに風呂の残り湯をくんで駆け付ける。



大揺れがおさまった直後② 近隣の救出・救護、安全確保

④救出救護に協力の時間帯

- お年寄りのお宅にはすぐに駆け付け、安全の確保、火の始末の手伝いをする。
- 倒壊物、転倒物の下敷きになっている人がいたり、行方のわからなくなった人がいたら、近所に救出や探索の応援を求める。
- 負傷者がいたら、応援を求めて救護所や医療機関へ搬送する。



自主防災会の活動

⑤避難生活期

自主防災組織

自主防災組織とは

いちばん初めに災害に対処する近所の人々のまとまった力

大規模な地震災害等の時には、建物倒壊、火災発生、道路欠損、電話不通など社会構造が破壊されて、消防などの公的な防災関係機関も「被害者」となり、活動が制限されることが予想されます。公的防災機関の出動をじっと待つわけにはいきません。地域のみなの協力と連携による行動しなく、それが最も頼りになるまとまった力となります。それを「自主防災組織」と呼んでいます。

理解し、協力しよう 自主防災組織



- 個々人が防災意識を持ち、家庭内での防災対策などを日頃から行っておくことは大変重要なことですが、私たちの住む地域全体を考えるとそれだけでは力不足です。大規模な地震災害が発生した時は、まずはじめに地域全体として対処しなければならないからです。
- 災害時に、出火防止、初期消火、救出・救護、応急手当、避難誘導、情報の収集・伝達、給食・給水、避難所の運営などの自主的な活動を地域自身が行うこととなります。
- こうした活動を効果的に行うためには、地域のみなが役割分担して、力を合わせて災害時に対処できるような組織の組み立てが不可欠です。

自主防災組織の目的と役割

- 大地震の揺れで火事が起こる——ありうることです。これを大火事にしてはなりません。同様に、人が倒壊物の下敷きになっていれば大急ぎで救出しなければなりません。災害下、来れるかどうかかわからない消防が来るのをじっと待っているわけにはいかないのです。
- これが、自主防災組織が絶対に必要という理由であり、存在の目的です。
- そしてその役割もおのずから理解できます。それらの行動は「いかに生命とわが家とわがまちを守るか」というところから生まれてきているわけですから、そのためには何をどのようにすればよいかと問い、答えを考えればよいのです。
- 日頃の防災意識や家庭での具体的な備え及び「向こう三軒両隣」など、近所の協力体制の啓発活動、初期消火の訓練と必要な資機材などの備え、救出救助に必要な知識と資機材の整備、あるいは「要援護者」世帯への安全確保のための日常からの支援—このようなことからみんなで話し合っって具体的に備えることが「役割」です。

見極めてから避難

市からその地域に避難命令が出たとき、近所で火災が発生し延焼の危険が出たとき、家屋や建物が倒壊する危険が出たとき、津波や土砂崩れの危険地域にいるときはすみやかに、指定されている避難場所等へ避難しましょう。

避難する状況判断をしたら…

避難の心得 8か条

1. 避難する前に、もう一度火元を確かめ、必ず電源(ブレーカー)を切る。
2. 各自が防災カードを身につける。
3. ヘルメットやずきんで頭部を保護。非常持出品など、荷物は最小限に。
4. 外出中の家族には、連絡メモを。
5. 避難は徒歩で、車やオートバイは厳禁。
6. 近所の人たちと集団で、子どもやお年寄りの手はしっかり握って。
7. 避難場所へ移動するとき、狭い道、塀ざわ、川べりなどは避ける。
8. 避難は指定されている避難場所へ。

混乱を起こさないために、避難するときのルールを守る。

避難するときには混乱防止のため、決められたルールと秩序を守り、お互いに協力し合うことが大切です。とくに乳幼児、お年寄り、自力で避難することが困難な人などを安全に避難させるために、日頃から地域の防災訓練に参加し、十分な対策を立てておきましょう。

避難するとき 車を使っていけない理由。

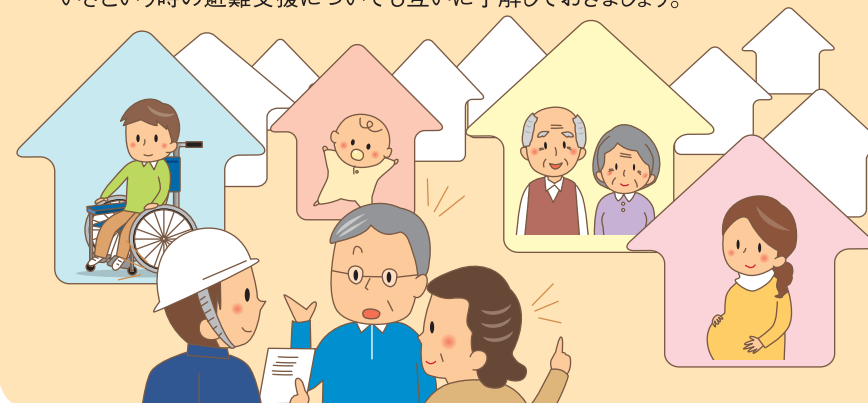
災害時に車で避難すると、かえって避難が遅れます。また避難場所やその周辺が車で混雑し、救援活動もできなくなってしまいます。自分の都合だけを考えた車の避難は絶対にやめましょう。



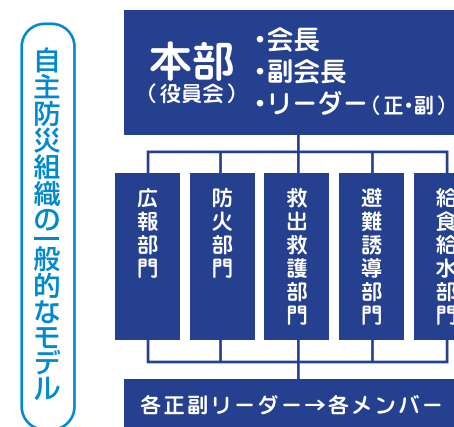
ここに力点を

災害時要援護者への支援体制づくり

- 高齢者や障がいのある方、妊婦や乳幼児などの、災害時に自力で避難することが困難な人たちのことを「災害時要援護者」といいます。これらの家庭とは普段からつながりを持ち、自主防災組織を中心に、災害発生後はすぐに駆け付けて初期消火や救出・救護、避難など地域ぐるみで体制を築いておきましょう。
- 普段は家具類の転倒防止など家内外の安全づくりを助け、いざという時の避難支援についても互いに了解しておきましょう。



自主防災組織活動の中身



●自主防災組織は、いくつかの専門部門を設けて活動の範囲を区切ることで、より深く、細やかにアプローチできるようになります。

●しかし、大切なことは、部門間の連絡、連携の協力体制です。災害発生下、安心安全の確保に何を、どのようにするかの目的達成には本部のリーダーシップがモノをいいます。